

研究種目：	基盤研究 (C)
研究期間：	2007~2009
課題番号：	19560534
研究課題名 (和文)	京都盆地の景域形成と「水みち」の役割に関する研究
研究課題名 (英文)	Historical Landscape Formation in the Kyoto Basin and the Role of Watercourse Network
研究代表者	
	川崎 雅史 (KAWASAKI MASASHI)
	京都大学・大学院工学研究科・教授
	研究者番号： 20195077

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、京都市内を流れる自然河川である賀茂川・鴨川とその水を分流する水路網などの「水みち」の総体を鴨川水系として定義づけた上で、その鴨川水系を基軸として明治以前に形成された水辺景域の構成と、その明治以降の変容を明らかにした。明神川系流域の上賀茂地区と禁裏御用水の水系と園池群を対象とし、池群の存在を支える面的な水系を把握し、水系を構成する水路が水辺景域内の住まいの敷地配置等を含む景域形成に与えた影響を明らかにした。

研究成果の概要 (英文)：

This Research clarified characteristics of the water front landscape and its configuration in the riverside area, and its historical formation process. The subject of this research is The Kamo River and its tributary small waterway and its network, especially on the Myojin River area, and the Kinri Goyosui waterway and ponds of gardens near Kyoto Imperial Palace. This research showed how the waterway and its network influenced on the configuration of the site and its formation of the characteristic landscape.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：土木工学、交通工学・国土計画

キーワード：景観、景域形成、水みち、京都盆地、微地形、水路網

1. 研究開始当初の背景

「景域／Landshaft」という語は、視覚概念に限定した「景観／Landscape」に対して、「地域的な一定の広がりがあり、そこに内包される具体的事物の認識と、それら事物の相互間に働く作用、さらにその総和として生成された生態的全体像の動的客体」（井出久登，1985）として用いられる。本研究における景域の語はこれに基づき、風景体験の場となる領域の概念として設定し、視覚を含めた空間的構成のされ方に焦点を当てる。

1999年に発表した申請者らの論文「疏水の遣水的利用に関する研究」（山田圭二郎・中村良夫・川崎雅史，環境システム研究 Vol.27）は、自然の猛威を露にする河川本流から取水し段階的に水位の調節を行いながら最も身近な空間にまでその水を導いてゆく過程を「遣水化」と捉え、〈人間 - 河川〉系の階層構造という新たな解釈により京都における疏水網を説明した。しかし、京都盆地における水系文化は、河川本流から取水する方法だけでなく、むしろ湧き水を水源とした小規模河川を遣りまわして利用するネットワークが山辺の社寺・集落・農地において発達していたものと思われる。

また申請者らは「山辺景域の敷地計画とデザイン手法に関する研究」、「京都盆地における『水みち』の構造と景観形成に関する調査研究」に取り組んできた。前者は主として近代以降に山辺における良質な敷地計画がまとまった景域を形成する要となった事例を分析するものであるが、山辺の領域における水みちのデザインの有効性も示唆している。後者は、この水みちと社寺庭園の関係に着目し、京都盆地全域における水のネットワークを浮き彫りにしようとした試みであった。本研究はこの後者の研究および「遣水的利用に関する研究」の延長上にあり、庭園に留まらず京都盆地の山裾から平野部にわたる生活・生産の領域を巡り、文化圏を形成する都市基盤としての水みちの構造を明らかにするものである。本研究により、湧水から大河川へ至る流域の中で形成される景域において、「水みち」

が要所で果たす役割が明らかとなるであろうと考えた。さらには、社寺境内や庭園の遣水としての利用においては、庭の性質にあった水勢を整えるための導水の技術が類型として見出され、集落においては生活と関わる利水形態の類型及び生活景として認識される景観の構成が見出され、また農耕地においては灌漑のためのシステムが風景となるときの見方の類型が明らかとなるであろうと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、明治以前に鴨川水系を基軸として形成された水辺景域の構成と、その明治以降の変容を明らかにすることを目的とする。本研究において鴨川水系とは、京都市内を流れる自然河川である賀茂川・鴨川とその水を分流する水路網などの「水みち」の総体として、その流域とは、水系によって供給された水を享受する範囲として定義する。なお、水辺景域とは、水利用または水辺空間利用に基づいて秩序立てられ、一体的なまとまりとして知覚される領域とする。

本研究で対象とする京都の市街部に隣接している鴨川（上流は賀茂川および高野川）本川は、京都の歴史に最も大きく関わってきた川である。古くよりその治水対策が周辺地域の土地利用に影響を与え、また河川敷が遊興の場として用いられてきたが、それとともに周辺農地の灌漑の水源、平安京以来の市街部へ水を送る都市内河川の水源、舟運を目的として開鑿された高瀬川運河の水源としても活用され、利水、治水の両面を見据えた水系が形成されてきた。水系を形成する鴨川の分流路はどれも狭小で、市街部では建物や街路を縫うように流れが設けられていた。それらの一部はかつて「川」と呼ばれており、その存在がある程度認知されているが、その水路網の全容が把握されているわけではなく、また水の供給先や実際に形成されていた水辺空間の様態については未だ明らかでない部分が多い。以上のような歴史を持つ京都鴨川水系は、近世までの市街部で見られた水利用、水辺空間利用とその近代以降の変容を追うとい

う本研究の目的に適した対象である。

本研究で取り上げる上賀茂地区の上賀茂神社と社家町、現在の京都御所周辺地区の園池群、そして鴨川先斗町地区の町なみは、近世までに鴨川水系を基軸として形成された水辺景域であるが、明治以降それぞれ異なる変容を経験した上で、現在ではその景観が観光資源としても活用されている。従って、近代以降の水辺景観の変容、消失、そして持続についても考察が出来るという点も特徴である。

3. 研究の方法

第一に、京都盆地の地形、地質といった自然条件と歴史的な水利用の経緯から、明治までに構築されていた鴨川水系を定義する。そしてその流域の土地利用と水系構造の特徴を、水系を構成する2つの系統のそれぞれについて明らかにする。また、定義した鴨川水系流域のうち、かつての水辺景域の痕跡が現存する2つの地区を選び、それぞれの地区で形成されていた水辺景域の特性と明治以降の変容についてそれぞれ明らかにする。

次に、賀茂川の東に展開していた用水系統である明神川系の流域に展開していた上賀茂地区を対象とする。上賀茂地区は、鴨川水系由来ではない御物忌川が水系に流入している点、また旧来の水系が比較的保存されており、旧来の水系利用やその結果立ち現われる景観が現在も一部残されているという点で、特徴的な地区である。そこで、上賀茂神社の門前に位置する社家町を取り上げ、集落内の水路と各敷地内の池によって形成された水系の明治以降の変遷を、歴史資料や地図類、現在の住人へのヒアリング調査結果を元に把握する。更に、水系を機軸として形成される水辺景域の特性を、社家の住まいの敷地配置と街路景観の面から考察する。

次に、賀茂川の西に展開していた用水系統である今出川系、堀川系のうち、現京都御苑周辺へ水を供給していた禁裏御用水(御用水)とその水を取り込んでいた園池群を対象とする。歴史的史料を用いて近世に構築されていた禁裏御用水の水系と園池を把握するほか、琵琶湖疏水流入をはじめとする明治以降の水系の変容を明らかにすることで、京都の市街域における鴨川水系の消失過程の一端を示す。

最後に、前章までの成果を示し、更にそれらを第2章で明らかにする鴨川水系の中に位置付け、鴨川水系およびその水辺景域の形成と変容の歴史としてまとめる。

4. 研究成果

本研究は、明治以前に鴨川水系を基軸として形成された水辺景域の構成とその変容を明らかにすることを目的として、鴨川水系の主要系統の流域に属する2つの水辺景域を取り上げ、それぞれについて明治以前の構成と明治以降の変遷を明らかにしてきた。以下に、得られた研究成果を示す。

1) 鴨川水系の定義と水系の整理

京都盆地の自然条件と歴史的な水利用の経緯から、明治までに構築されていた鴨川水系を定義した。鴨川水系は賀茂川および鴨川とそれを水源とする水路群で構成され、古代より賀茂川と深いつながりを持っていた上賀茂神社が明治まで配水権を持ちつつ灌漑用水系統を統括していた。そしてこの水系の流域にあたる農地部と市街部は、賀茂川扇状地と下流の鴨川扇状地にほぼ該当する。次に、この鴨川水系とその流域の土地利用の特徴を、水系を構成する明神川系、堀川系と今出川系のそれぞれについて、以下のように明らかにした。

鴨川水系の中でも配水面で優遇されていた明神川系には、上賀茂神社境内で北山の谷水を集めた御物忌川の水が合流していた。近世の今出川系、堀川系では、上流で農地灌漑に用いられた水が下流の平安京以来の市街域へも通水されており、平安時代より中川や今出川が賀茂川の水を市街域へ送っていた。また堀川については、元々は盆地内河川を改修した流れであったところに、規模の小さい盆地内河川の水量を補う目的で鴨川水系堀川系の水を流入させるようになったという仮説を立てた。明神川系、堀川系、今出川系の各用水系統は、農地灌漑のみではなく上賀茂集落や下流の市街地への通水も担う系統であった。

以下では、鴨川水系の流域で現在でもかつての水辺景域の痕跡が確認できる2つの地区を選び、形成された水辺景域の構成およびそ

の変容を明らかにした。

2) 明神川系流域・上賀茂地区における水辺景域の構成と変遷

明神川系の流域に形成された上賀茂地区に着目し、社家町内に池と水路で構成されていた水系の明治以降の変遷について、以下のよう

に明らかにした。

上賀茂社家町では、中世以前より下流の農地への農業用水を兼ねた水系が整備されていたと考えられ、明治初期からしばらくは発展していたものの、上水道整備による生活用水のシフトや道路側溝としての再整備、水質の悪化、社家の住まいの再開発により徐々に変容、衰退し、住人の生活から切り離されていった。近世より池を保有していた社家の住まいでは、基本的に遣り水や池を接客空間に設け、アプローチや座敷からの鑑賞を意識した意匠を施すという一定の様式に則った敷地配置がなされていた。明治以降に建設された和風建築でも、このような接客空間の設け方とそれを構成する諸要素が踏襲され、鑑賞や鯉の飼育を目的として池が建設され維持されていたが、この様式を踏襲していない池も新設されていた。このような社家の住まいの敷地配置が水路や通りといった敷地条件に依存するという前提として、現在「社家らしい」とされている要素である、土橋、門と土塀越しの緑の街路景観への表出について、それぞれ考察した。これらの考察より、社家町の水辺景域とその景観の秩序形成に水系が大きく関わってきたことが確認されたが、現在認識されている「社家町らしい」街路景観が必ずしも社家町全体に当てはまらないことも同時に確認された。具体的には、街路景観への庭木の表出や近代的な改築の影響の有無については、敷地条件の差異から、各エリアで異なる傾向が見られることを確認した。また、土橋は伝建地区にあたる南大路辻子以西の藤ノ木通り南沿いに玄関を設ける住まいのみに見られるが、そもそもそれ以外の場所では見られず、またその数は明治以降に増えていったものであることを確認した。

3) 禁裏御用水流域の園池群における水辺景域の構成と変遷

現京都御苑周辺地区へ水を送っていた禁裏御用水を取り上げ、流域の園池群を組み込んだ広域的な導配水システムとしての近世の水系を把握し、その明治以降の変容を明らかにした。

近世に構築された禁裏御用水の通水システムとして、他の井手に見られない石垣と二重の樋口を持った小山郷井手、小山郷内の灌漑のために分配した使用済の水を集め、市街部で再度本筋に合流させる流路構造、相国寺前で余剰水を排するための悪水抜溝、公家町内での御溝水による水路網の存在を把握した。これらの特徴から、禁裏御用水は、上流の農地と下流の市街部での水の共用にも配慮し安定供給を目指した水系であったと結論付けた。そして、相国寺以北に形成されたほとんどの池が禁裏御用水の一部を導水路により分流して利用していたが、相国寺開山塔庭園のみは幹線流路をそのまま庭園内に取り込んでいたことを確認し、この特殊性が庭園成立や禁裏御用水の成立のいきさつと関連する可能性を指摘した。また公家町での禁裏御用水が、幹線流路と御溝水により各敷地の園池に配分されていたことを示した。従って、この地区の園池群は鴨川水系を基軸とした水辺景域として成立していたことが確認された。

明治に入って、禁裏御用水には疏水分線からの水の流入や流路の変更という改変が行われ、水系と水辺景域は解体されていった。明治23年からは疏水分線から水が流入したが、それは禁裏御用水本筋のみを対象としたものであった。その際、京都御苑内でも御溝水の改修と再編が行われたほか、御苑から京都府庁や寺町方面へ水を送る流路も新設された。そして明治45年の御所水道建設後は、京都御苑より上流の園池へは疏水の水が送られなくなった。更に、小山郷井手から流入する3つの水みちのうち新町頭の悪水溝から続く水みちは明治23年から大正末年までの間に堀川系へ合流するようになり、これが擁翠園への通水停止の原因となったものと推測した。旧来の鴨川水系の水の供給は昭和初期まで続けられ、周囲の園池に水が送られていた。その間、付近の民有地内に新たな園池の設置も見られた。禁裏御用水の廃止の原因については未確認であるものの、上流農地に対して行

れた区画整理事業と関係する可能性を指摘した。

4) 水辺景域での水系への関わり方に関する考察

本研究で取り上げた上賀茂地区、現京都御苑周辺地区は、それぞれ鴨川水系の明神川系、今出川系を基軸としてひとつのまとまりを形成していた地区である。水を引き込んで園池を形成するという水系利用の型が、園池群の形成を促した。特に上賀茂社家町については、園池群の存在を支える面的な水系が把握されたほか、水系を構成する水路が水辺景域内の住まいの敷地配置に影響を与え、その結果、水辺景域内の街路景観に一定の秩序が生まれていたことを確認した。このような水辺のあり方は、近代的な河川空間のそれとは根本的に異なるものであり、また近代化により変容し失われていったものである。

鴨川水系流域の水辺景域が明治以降に変容としていった要因としては、水系自体の変容と水系に関わる主体の変容の両面があり、そして地区毎にその変化の要因が異なっていることが確認された。京都御苑周辺地区では、水系自体が廃止されることにより、周囲の園池が地下水利用に切り替えられたり、枯山水の庭に造り替えられたりした。ただし、明治以降に園池が新設された例もあり、園池群の変容は水系の変容に合わせて段階的に起こったようである。上賀茂地区では、水系の廃止という危機的なインパクトはなかったものの、道路整備や下流農地の宅地化に伴う水系の整理という外的要因に加えて、水質の悪化と上水道整備を受けた生活用水のシフト、あるいは伝統的な住まいの再開発といった水系利用者の意識や価値観の変化も水辺景域の変容の一因であったことが確認された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (審査付き計2件)

①林倫子、藤原剛、出村嘉史、川崎雅史、樋口忠彦：禁裏御用水の構成と周辺園池との関係，土木学会論文集D，Vol. 65，No. 2，pp. 187-197，2009

②林倫子，林孝弥，出村嘉史，川崎雅史：明治以降の上賀茂社家町における池と水路網の水システムの変遷，土木史研究論文集 Vol. 28，pp. 59-65，2009

[学会発表] (計7件)

①林倫子，神邊和貴子，出村嘉史，川崎雅史：明治・大正期の納涼床営業者の鴨川官有地利用に関する研究—先斗町三条・四条間を対象として—，土木史研究講演集 Vol. 29，pp. 21-26，2009. 7. 4，北海道教育大学

②林倫子，林孝弥，出村嘉史，川崎雅史：上賀茂社家町の社家の住まいにおける池の機能と敷地配置，景観・デザイン研究講演集，No. 4，pp. 271-277，2008. 12. 12，熊本大学

③林倫子，林孝弥，出村嘉史，川崎雅史：明治以降の上賀茂社家町における水路網と池の変遷，土木史研究講演集 Vol. 28，pp. 287-291，2008. 7. 5，九州大学

④松下倫子，藤原剛，出村嘉史，川崎雅史，樋口忠彦：水みちの通水システムからみる園池形態—禁裏御用水を対象として—，景観・デザイン研究講演集 第3号，pp. 319-325，2007. 12. 7，早稲田大学

⑤松下倫子，藤原剛，出村嘉史，川崎雅史，樋口忠彦：江戸期の堀川系における水の共用に関する研究，土木計画学研究発表会・講演集 第36号，p. 290，2007. 11. 23，八戸工業大学

⑥松下倫子，出村嘉史，川崎雅史，樋口忠彦：上賀茂，明神川水系の地形的特異性に関する研究，土木学会年次学術講演会講演概要集 第62号，pp. 425-426，2007. 9. 13，広島大学

⑦神辺和貴子，出村嘉史，川崎雅史，樋口忠彦：鴨川河畔における料亭・旅館の空間構成に関する研究，平成19年度土木学会関西支部年次学術講演会講演概要集，CD-ROM，2007. 5. 26，大阪大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川崎 雅史 (KAWASAKI MASASHI)
京都大学・大学院工学研究科・教授
研究者番号：20195077

(2) 研究分担者

出村 嘉史 (DEMURA YOSHIFUMI)
岐阜大学・工学部・准教授
研究者番号：90378810

樋口 忠彦 (HIGUCHI TADAHIKO)
広島工業大学・環境学部・教授
研究者番号：00016669
(2007年度のみ)

(3)連携研究者
なし